



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	サブカルサブリ第30回 : アニ玉祭の魅力と今後の可能性 : 魅力的なアニメ作品が生まれ続ける社会に向けて
Author(s)	山村, 高淑
Relation	埼玉新聞2014年12月21日版、特集「サイタマニア」、p.1
Citation	埼玉新聞
Issue Date	2014-12-21
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57679
Type	article
File Information	20141221 Saitamania subcul suppl No.30.pdf



サブカル
サブリ

アニメや漫画の舞台地が多いサブカル王国・埼玉。
その魅力を「アニメツーリズム」の専門家、山村高淑氏が紹介する。

●プロフィール やまむら・たかよし
北海道大学観光学等研究センター教授
埼玉県アニメの聖地化プロジェクト会議座長

極めて個人的な感想で恐縮なのですが、今回のアニメ玉祭で一番感動したこと、それは、「聖地巡礼観光物産展&聖地巡礼マーケット」で「木崎湖キャンプ場」さんと「小諸市なつまちおもてなしプロジェクト」さんのブースが隣り合っていたことです。これは『おねてい』『なつまち』ファンにはたまらない夢の共演でした。そしてその場で、それぞれの町でいつもお世話になっている皆さんとも再会でき、これまた感動でした。

地理的に離れていても
つながる地域

この「聖地巡礼観光物産展&聖地巡礼マーケット」は大きな可能性を示してくれました。つまり、いわゆる「アニメ聖地」になったことがきっかけとなり、地域どうしが横につながり始めたのです。

昨今よく「広域連携」という言葉を耳にしますが、この語は通常、隣接する自治体間での連携を指します。しかしアニメ玉祭が志向する地域間連携は、明らかにこうした「広域連携」の概念とは異なるのです。地理的近接性からなる政策的な連携ではなく、コンテンツが契機となったことで問題意識を共有した有志連合と言っても良いかも知れませんが。アニメ祭初日の午後開催された「アニメの聖地サミットin埼玉」でも、富山県南砺市さん、茨城県大洗町さん、秩父市さん、久喜市さんという4つのまちのお話を聞きつつ、そのことを強く感じました。

こうした点は、数年前から、埼玉県さんが県内アニメ聖地連携の取り組みを進めてきたことの成果でもあります。とりわけ、久喜市・秩父市・川越市・飯能市という埼玉4大聖地の連携事業は全国的にも大きな影響を与え続けています。このあたり、アニメ聖地というテーマを超えて、今後の日本の地方の在り方を問う上でも、大きな示唆を与えてくれます。

聖地で頑張る「あの人」に
会えるイベント

さらに踏み込んで言えば、「地域間連携」という言い方も適切ではないかもしれません。もはや行政区画の枠を超えて、問題意識を共有した人たちが横につながっているからです。冒頭でも少々触れましたが、今回のアニメ玉祭の主役だったのは、それぞれの聖地で頑張っ

魅力的なアニメ作品が生まれ続ける社会に向けて

アニメ玉祭の魅力と今後の可能性

ていらっしやる皆さんだっと思っています。事実、こうした皆さんに会うために会場に来たファンも多かったはず。

そしてここで重要なポイントがあります。こうした地域で頑張っているらしやる個性の皆さんの肩書は、市の職員であったり個人事業主であったりと様々です。でも、やられているお仕事は、明らかに地域側のプロデューサーなんですね。つまり、地域の内と外の「つなぎ役」をされている。実際、アニメ聖地として継続的に盛り上がる事ができるかどうか、その成否を左右する要件として最も重要なことのひとつは（もちろんコンテンツそのものが良質であることは大前提なのですが）、地域側と製作側の双方に「つなぎ役」となれる人がいるかどうかです。

アニメ玉祭でこうした人々にスポットが当たったことは非常に大きな意義があったと思います。というのも、シビアナ話になります。製作側の目的は地域振興。製作側の目的はコンテンツビジネスです。明らかに目的が異なるわけですから、そのままでは平行線。うまくいくはずがありません。そこを調整し、双方にメリットのある形で、しかもファンの皆さんにも喜んでもらえる形にしていくな。アニメ聖地の舞台裏には、そうした能力を持った人が、地域の側にも、製作の側にも必要なのです。

地域・製作双方の
「つなぎ役」が集える場に

これまでのアニメ玉祭では、どちらかと言えば、そうした「つなぎ役」の皆さんのうち、地域側の皆さんにスポットを当ててきました。もちろんそれがアニメ玉祭の魅力なのですが、今後はそれに加えて、もっと製作側の「つなぎ役」の皆さんの声も聞くことができる場にしていくな。必要があるのではないのでしょうか。というのも、「アニメ聖地」を語る以上、やはり究極の目標は、「魅力的なアニメ作品が創り続けられていく社会を創っていくこと」にあると思うのです。そのためには、当然、地域のことだけでなく、アニメという産業・文化のために地域は何ができるのかについても考える必要があります。今後のアニメ玉祭に求められる役割のひとつは、双方の「つなぎ役」が集い、こうしたことを熱く議論できる場となることではないかと感じています。